

第3次対がん戦略 「今後のがん研究のあり方に関する 有識者会議」報告書について

国立がんセンター研究所
がん予防研究部／臨床疫学研究部
津金 昌一郎



がん研究については、「対がん10カ年総合戦略（昭和59年度～平成5年度）」及び「がん克服新10カ年戦略（平成6年度～平成15年度）」を中心に、各省横断的に総合的かつ戦略的に、種々の研究や施策が進められ、多くの成果が得られているが、残されている課題も多い。このため、文部科学省研究振興局長及び厚生労働省大臣官房技術総括審議官の合同の私的な懇談会として、「今後のがん研究のあり方に関する有識者会議」（座長：杉村隆 国立がんセンター名誉総長、他12名の委員で構成）を平成13年7月に設置し、これまでのがん研究の成果を総括するとともに、今後のがん研究のあり方についての検討を行った。その会議における資料作成のために作業班（班長：広橋説雄 国立がんセンター研究所長、他22名の班員で構成）が設けられ、がん生物、発がん、診断、治療、疫学・公衆衛生、がん情報・社会学の6分野にわかれ作業が行われた。そして、3回にわたる会議を経て、その報告書が平成15年3月に公表された。疫学・公衆衛生分野で、愛知県がんセンターの田島先生と私が作業班として参加し、その素案の作成に関わったので、その報告書の中から、がん疫学研究会の今後のあり方に関する記述を中心に、紹介させて頂く。報告書の全文について <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0331-6.html> にて、閲覧可能となっている。

報告書は、1. 緒言、2. 第3次対がん戦略への提言、3. 重点研究と支援事業、4. 10年後のがん研究・がん医療の姿（目標）、より構成され、3についての詳細が参考資料として別途に示されている。ここでは、紙面の制約もあるので、2と3について、疫学関連の記述を中心に、報告書を抜粋しながら紹介する。

第3次対がん戦略への提言

「がんの罹患率と死亡率の激減を目指して」というキ

ャッチフレーズをもとに、そのために「がんの本態解明と克服に向けた新しい研究戦略を構築し、個々人に最適の世界最高水準のがんの予防と医療を国民全体が享受する社会を実現する」と記されている。そして、重点的に研究を推進する分野として、

- 学横断的な発想と先端科学技術の導入に基づくがんの本態解明の飛躍的推進
- 基礎研究の成果を臨床・公衆衛生に導入するための橋渡し研究としてのトランスレーショナル・リサーチの推進
- 革新的ながんの予防法の開発
- 革新的ながんの診断・治療法の開発
- がんの実態把握と、がん情報・診療技術の発信・普及が挙げられ、さらに、これら重点研究の強力な推進のために、
- 「支援事業」の整備と拡充
- 文部科学省と厚生労働省の支援によるがん研究組織の密接な連携と調整が必要と記されている。

がんの予防や実態把握について、診断・治療などの医療と同様に重要視されると共に、トランスレーショナル・リサーチの目標として、公衆衛生導入が記された。作業班当初の原案では、“・公衆衛生”は含まれていなかったが、「がん対策は、臨床（＝医療）のみならず、公衆衛生（＝保健）を場としても行われるべき」であるとする、われわれの提言が受け入れられた。

重点研究と支援事業

「第3次対がん戦略への提言」の各論であり、疫学関係の記載を抜粋する。がんの本態解明では「ゲノム情報、病理診療情報、生活習慣情報の相関性を解明し、テーラーメイド予防・治療の基盤を作る」、トランスレーショナル・リサーチの推進においては「国家レベルの臨床・公衆衛生研究実施体制の整備」、がんの実態把握では「がん登録事業を全国レベルで展開する」、ことなどが記されている。そして、がん予防においては、「(1) 微生物・ウイルスを含む環境中の発がん要因の同定と曝露情報の収集を強力に推進する、(2) 発がんの要因と発がん機構の関連性を明らかにして、新しい予防法の確立を目指す、(3) 生活習慣・環境要因・遺伝的要因の相互作用と発がんリスクとの関連を明らかにする大規模長期コホート研究など、分子疫学的研究を全国的規模で展開する、(4) 禁煙への関心度に応じた、簡便で効果的な禁煙サポート方法を開発し、地域・職域・医療などあらゆる機会を利用して全国に普及する、(5) 遺伝子・ゲノム情報を取り入れて、発がんのリスク別に層別化された集団を対象とした生活習慣改善・化学物質投与等による介入試験を、罹患率減少をエンドポイント（評価指標）として展開する」の5項目を挙げ、基礎研究との融合に基づき、革新的ながん予防法の開発を目指すことが記されている。さらに、特筆すべきは、支援事業の一項目として「がん登録事業等、疫学研究における基盤整備を図る」と記

されていることである。その詳細としては「がんの罹患と予後について、実態と動向を正確かつ継続的に把握するため、地域がん登録事業等の疫学研究の基盤となる体制の整備を図る。また、発がん要因の解明や有効な予防法開発のために必須である大規模・多施設・長期の疫学・予防研究を実施可能にする研究支援基盤（生物統計研究者、研究支援者、研究費など）の充実を図る。そして、欧米諸国と比べて相対的に劣っている日本を含むアジア諸国の疫学・予防研究を推進するために、疫学・生物統計学専門家の必要性について社会的により良く認知してもらう努力と同時に、専門家を育成するための国際的な公衆衛生学教育を実施する。その結果、実態に即した、臨床・公衆衛生の場においてエビデンス（科学的証拠）に基づいた、真に日本人にとって有効ながん対策を進めることが可能になる」との説明が記されている。

以上、報告書について、疫学に関連する箇所を中心に紹介させて頂いた。第3次対がん戦略においては、これまで以上に、疫学研究が推進されることが明記されている。がん疫学研究会会員の皆様の積極的参加・貢献なくしては、第3次の成功はあり得ないものとなった。しかしながら、その期待にどこまで応えられるか？われわれに果たされた責任は重い。



パーソナリティとがん罹患に関する 前向きコホート研究

東北大学大学院医学系研究科公衆衛生学分野
中谷直樹、坪野吉孝

性格や情動などの心理的特徴とがんの関連は古くから指摘されてきた。紀元2世紀、古代ローマの医師ガレヌスは、『腫瘍論 (De Tumoribus)』において「黒胆汁質 (melancholic)」の女性は、「多血質 (sanguine)」の女性に比べ、がん罹患しやすいと記述している。

性格とがんに関する疫学研究は、症例対照研究が6件、前向きコホート研究が10件行われているが、規模が小さい点、十分に交絡要因を考慮していない点があり、いまだ議論されている。われわれは、これまでの研究において、最大規模のがん罹患例 (986例) を用い、パーソナリティとがん罹患リスクとの関連を7年間の前向きコホート研究にて検討した (Nakaya N, et al. J Natl Cancer Inst 2003;95:799-805.)。

40-64歳の宮城県の地域住民29,606名を解析対象とした。Eysenck Personality Questionnaire-Revised (EPQ-R) の下位尺度である「E尺度 (extraversion); 外

向性傾向」、 「N尺度 (neuroticism); 神経症傾向」、 「P尺度 (psychoticism); 非協調性」、 「L尺度 (lie); 虚構性」は、がん罹患リスクとの関連を示さなかった。しかし、N尺度 (神経症傾向) が高くなると、がんリスクが上昇する傾向が認められた。そこで、追跡期間別の検討を行った。

- (1) ベースライン時におけるがん既往者のがん有病リスク：神経症傾向のスコアが高くなるにつれ、がん既往リスクが有意に上昇した ($P_{trend} < 0.001$)。
- (2) ベースライン時から3年以内に発症したがん罹患リスク：神経症傾向のスコアが高くなるにつれ、がん罹患リスクが有意に上昇した ($P_{trend} = 0.03$)。
- (3) ベースライン時から4年以降に発症したがん罹患例のがん罹患リスク：神経症傾向とがん罹患リスクには関連を認めなかった ($P_{trend} = 0.43$)。

以上から、性格ががん罹患リスクに及ぼす影響は認められなかった。また、神経症傾向はがん罹患の原因ではなく、結果である可能性が示唆された。

先行研究と比べて、今回の研究の特徴は3点ある。第1は、これまでで最大規模の前向きコホート研究という点。第2は、1960年代にがん性格の関連を提唱し最初の近代的研究を行った、英国の心理学者 Eysenck 自身が開発した性格調査票を使用して、両者の関連を否定した点。第3は、同一のデータセットの中で「断面研究」としての解析と「前向きコホート研究」としての解析を同時に行い、性格とがんとの時間的前後関係を詳細に検討した点である。「さらに研究が必要」なのはもちろん言うまでもないが、がん性格をめぐる2000年来の論争に決着をつけるデータになり得るのではないかと、密かに自負している。今後は、健康な集団のがん罹患ではなく、がん患者の予後と性格との関連について、検討したいと考えている。



テリー・フォックス・ラン

名古屋市立大学 大学院医学研究科
健康増進・予防医学分野
徳留信寛

皆さんはテリー・フォックス・ランのことをご存知でしょうか。ご参考のために、大会パンフレットから囲み記事を添付します。なお、機会があれば、<http://www.terryfoxrun.org/> をご覧いただきたい。

テリー・フォックス・ランに参加しませんか
テリー・フォックスはカナダの青年である。骨肉腫という「がん」のため右脚を切断したあと、がん研究基金を募るため、1980年に「The Marathon of Hope」を始めました。鉄のような固い決意で、北アメリカ大陸横断を目指し、義足を着けて、毎日フルマラソンと同じ42kmを走り続けました。しかし、143日目、約5,000kmを走ったところで、「がん」が肺に転移し、テリーの命は尽きました。その後、彼の遺志を受け継ぎ、2001年にはカナダの3,500ヶ所、全世界60ヶ国の267ヶ所で、テリー・フォックスと冠したランやウォーキング大会が開催されています。日本では東京都と三重県で始まり、本大会で集められた募金はカナダの本部と愛知県がん研究振興会に寄付されています。あなたの行動を待っています。「がん」で亡くなられた方々を供養し、今、「がん」と闘っている人たちを励まし、「がん」の研究者を支援するために。

さる5月18日～25日に三重県松阪市を中心に開催された第9回テリー・フォックス・ランのイベントに参加した。大会は太田正隆さんを実行委員長、継松正実さん・上村真由さんを副委員長として、多くの実行委員・ボランティアに支えられ、三重県、愛知県、岐阜県、和歌山県、カナダ大使館などの後援を受け展開された。

5月21日に、3ルートが同時スタートする。北からの参宮みちは愛知県がんセンター、岐阜市岐阜公園をそれぞれスタートし、桑名市役所で合流する。22日には桑名から三重県庁まで走り、23日に津から松阪駅に着く。南からの熊野みちは三重県那智山神社をスタートし、尾鷲市役所に着く。22日には尾鷲から大宮町役場まで走る。23日に大宮から松阪駅に着く。最終25日には松阪駅から中部台運動公園へ歩き、中部台トリムコースでのラン・ウォーク、ワークショップなどのファイナルイベントが行なわれた。

私は年休を取り、21日の朝、愛知県がんセンターへ向かった。午前9時に大野竜三総長から激励を受け、疫学予防部長の田島和雄さん、図書室司書の安田多香子さん、初マラソンを走る会事務局長越田信さんの友人の長谷明義さん、愛知県庁走友会の皆さんなどとテリー・フォックス・ランの旗を背中に掲げスタートした。途中、愛知県庁を訪れ、大須観音を經由し荒子観音までの17キロ弱をジョギングした。ここで昼食をとった。多くの方は勤務の関係でここまでだった。これ以降の桑名市役所までは、安田さんと長谷さんのお二人に走って貰うこととなった。



ジャーニーランに関する講演会、がん予防とコントロールに関するシンポジウムもあった。5月18日(日曜日)の午後には、松阪市三重信用金庫本店5階講堂で越田事務局長が「アメリカ大陸横断5,000kmの走り旅」と題して講演した。

5月24日(土曜日)の午後には、まず、田島さんの基調講演「がん予防の近未来」があり、その後、パネルディスカッション「がんと闘い、がんと生きる」が開催された。愛知県がんセンター嶽崎俊郎さんは「胃・食道がんの予防：日本と中国の比較研究から学ぶこと」、私は「生活改善によるがん予防：特に、大腸がんの予防」、廣瀬かおるさんは「食生活改善と運動推進による肥満防止・乳がん予防にむけて」、松阪中央総合病院の玉置久雄さんは「がん体験者によるがん予防：日常生活の工夫」

と題して話をした。特に、玉置さんはご自身の胃がん体験談を話され、外科医の不規則な生活習慣ががんの原因であろうと考察された。

その夕刻には上村真由さん宅を訪問し、太田正隆さん、継松正実さんなどの実行委員・ボランティアおよびパネリストと、松阪牛、猪肉、筍など奥様の美味しい料理をいただいた。来年は10周年を記念して、テリーのお母さんベティを呼び大会を盛り上げようという提案があった。うまい酒も入り、時が経つのを忘れ、深刻まで歓談した。

テリー・フォックスが走る様子が収録されたビデオ”The Life and Times of Terry Fox”を見て、彼の人間愛に裏打ちされた崇高なボランティアスピリットと強靱な体力に感動した。大会パンフレットに素晴らしい詩を見つけた。その言葉を紹介して、本稿のメとする。

What cancer cannot do.
Cancer is so limited,
it cannot cripple love,
it cannot shatter hope,
it cannot corrode faith,
it cannot destroy peace,
it cannot kill friendship,
it cannot suppress memories,
it cannot silence courage,
it cannot invade the soul,
it cannot steal eternal life,
it cannot conquer the spirit.
(Author unknown)



◇★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★◇

ブランチの椅子

国立がんセンター研究所 がん情報研究部
濱島ちさと

サンフランシスコ現代美術館で「ブランチの椅子」を見た。

「欲望という名の電車」のブランチである。透明のプラスチック素材の椅子一面封じ込められた、深紅の薔薇。照明にほんやり映し出される全体像に比べ、薔薇の影だけがくっきりと浮かび上がっている。

製作者の倉本史朗は造形作家で、数年前に若くして世を去っている。私がある存在を知ったのは、渡辺武信氏の中公新書「住まい方」シリーズで、確か渡辺宅のテーブルの話からだ。渡辺は詩人・映画評論家としても知られているが、本業は建築家である。住まいづくりから暮らし方へと思いをこめたこのシリーズは、住まいは便利なだけでなく、住み心地のいいことが重要という氏のポリシーが伝わってくる。数年前、同じ町に移り住んだ私にとっては、住まいの環境として記述される光景が日常的なもの嬉しい。

その「住まい方」シリーズの一説に、建築事務所の経営の話がでてくる。自分の理想と考えられる建物を建てるためには、経営者として、自分がしたくない仕事、たとえば職員の給料の計算などの業務もしなくてはならない。これらの雑事をも含めて引き受けることが、自分が望ましいと考える建物を作るためには避けて通れない前提条件となる。こうしたことは、誰もが日常的に感じることに違いない。医療職や研究職にしたところで、同様である。

今年2月に、国立がんセンター研究所がん情報研究部がん発生情報研究室に異動した。新しい職場に慣れるまで少しはのんびりできるかと思いきや、すぐさまがん予防・検診研究センター開設準備やら、がん検診ガイドライン更新といった仕事が始まり、半年が瞬く間に経過してしまっただけ。がん検診については、癌研究会付属病院では検診の実務を担当できたものの、黒川利雄先生が亡くなると当初の理念も消えてしまったし、大学での仕事でがん検診は one of them にすぎなかった。がん検診は確かに私が最もしたい仕事ではあるけれど、再びそれを生業とするのはどうかという思いがあり、今回の異動については逡巡した。

現在は、従来から継続の胃がん検診や経済評価も含め、がん検診一色である。それでも、前提条件と理想が渾然と一体化し、大きな波にも飲み込まれたように、仕事は進行している。ふと、透明な椅子に咲く孤高の薔薇を思うこともある。そして、締め切り間近の仕事に追われながら、あの給料の話の思い浮かべ、机に向かう毎日である。



んが、今回は日本を代表する職業がん・環境がんの疫学研究が揃い、久方ぶりにこの領域のまとまった話が聞けました。順番に①「放射線作業者のがんのリスクとその評価」については、村田 紀(放影協・放疫セ)先生、②「原発周辺住民の潜在的放射線リスク研究」は吉本泰彦、吉永信治(放医研・放射線安全研究センター)先生、③「小児白血病と送電線・電気製品など環境電磁場暴露について」は、兜 真徳(国立環境研)、齋藤友博(国立成育医療センター・成育疫学)先生、④「高周波電磁界暴露の健康影響」、は山口直人先生(東京女子医科大学) ⑤「シリカアスベスト曝露による職業がん」高橋謙(産業医科大学環境疫学研究室)先生、⑥「紙パルプ産業における硫化物等の曝露とがんのリスクーIARC 国際共同研究」岸 玲子(北海道大学・院・医・予防医学・公衆衛生)、三宅浩次先生(北海道産業保健推進センター)。⑦「環境発がん予防におけるメカニズム研究の重要性」花岡知之先生(国立がんセンター研究所支所臨床疫学研究部)。最後に⑧「放射線発がんと化学発がん」秋葉澄伯(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科)先生が示唆に富むまとめをしてくださいました。

8人の講演はいずれも豊富なデータの割に発表時間が足りず、用意した4時間半が、あっという間に過ぎましたが、幸い、ワークショップは別集(単行本)として出版されることになりました。第6回の倉恒先生以来、20年ぶりです。関心をお持ちの皆様がたには是非ご一読をお願いします。

第2日には教育講演「健康と環境：リスク評価のデータサイエンス」を柳川 堯九州大学教授にお願いしました。環境汚染の場合、実際には複数要因に曝露するほうが多いので複合的リスク評価が重要ですが、グラフィカルモデリング技法とその数理統計学的意味を分かりやすく解説していただきました。合同特別講演としては「チトクローム P450 の遺伝的多型の薬理的・毒性学的インパクト」(鎌滝哲也 北海道大学大学院薬学研究科教授)をお願いしました。合同シンポジウムは「遺伝子多型と発がん感受性」のテーマで、①日本人に多いアレル少ないアレル、(浜島信之先生、名古屋大学・院・予防医学/医推計・判断学)、② HLA 遺伝子多型と成人T細胞白血病の感受性、(園田俊郎先生、鹿児島大学地域共同研究センター)③肺がん感受性を規定する遺伝子の探索(河野隆志先生ほか、国立がんセンター研究所生物学部)、④薬物・ステロイド代謝酵素遺伝子多型と前立腺がんリスク(佐田文宏ほか、北海道大学・院・医・予防医学・公衆衛生)、⑤抗がん薬代謝酵素の遺伝子多型(山崎浩史先生ほか、北海道大学大学院薬学研究科)、⑥「普通のがん」の高危険度群の把握のための遺伝子探索戦略(吉田輝彦先生、国立がんセ・研 腫瘍ゲノム解析・情報研究部)の6人の講演がありました。Molecular epidemiology の進歩によりがん予防戦略の精度があがるのが期待できる内容でした。

なお今回は、会員の皆様の声を取り入れ、若手が参加しやすいように一般演題(ポスター)を募集しました。会員同士のふれあい交流を通して、今後の研究活動に少してお役にたったなら幸いに思っております。

◇★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆◇

第26回日本がん疫学研究会を日本がん 予防研究会と合同で開催して

第26回 日本がん疫学研究会会長
北海道大学大学院医学研究科予防医学
講座公衆衛生学分野
岸 玲子

第26回日本がん疫学研究会は、日本がん予防研究会と合同で6月23-25日、北海道大学学術交流会館で開催しました。風薫る若葉の札幌に全国から多くの参加があり、熱心な発表と議論が行われ盛会のうちに終えることができました。この場を借りて皆様がたに厚く御礼申し上げます。

第1日目にワークショップ「職業・環境がんの疫学—低濃度(レベル)曝露下でのリスク評価の現状と課題」を組みました。欧米に比べますと、日本では環境要因や職業要因については、研究者そのものも多くはありませ



平成15年度日本がん疫学研究会幹事 会議事録要旨

日時：2003年6月23日

場所：北海道大学学術会館 第2会議室

出席者：岸、森、辻、坪野、本荘、津金、稲葉、山口、祖父江、濱島ちさと、岡本、永田、徳留、田島、浜島信之、渡辺能行、森本、津熊、石川、竹下、清水由紀子、中地、吉村、田中、秋葉（25名）、広瀬（事務局）

欠席者：深尾、箕輪、山本、清水弘之、玉腰、菊地、味木、中村、古野

〔議事録要旨〕

- 庶務報告（庶務担当幹事：浜島）
 - 1) 会員数：2003年6月10日時点で会員数は255人、海外顧問3人、賛助会員1社であった。1990年から会員数はほぼ一定である。
 - 2) 第25回研究会の記録は篠原出版新社の癌の臨床Vol149, No 1, 2003に、特集「第25回日本がん疫学研究会」として発刊された。
 - 3) NEWS CASTの発行：主編集者古野幹事、副編集者祖父江幹事によりNo.70からNo.73までの4号が発刊された。
 - 4) 会計報告：平成14年度の会計収支報告が行われ、中地監事、永田監事からの監査報告後、承認された。名簿作成費を除く平成14年度の実績とほぼ同じの平成15年度予算案が承認された。
- 役員等の一部改選（代表幹事：徳留）
 - 1) 特別会員の推薦：吉村幹事、山本幹事、稲葉幹事が特別会員として幹事会で推薦された（総会において承認された）。
 - 2) 幹事の改選：2003年6月30日付けで19名が任期満了となるため、19名の幹事の選挙が行われた。3名の特別会員となった幹事を除き、16名が再選され、新たに嶽崎俊郎、井上真奈美、溝上哲也会員が新幹事として推薦された（総会において承認された）。但し、改選対象の徳留幹事は代表幹事としての任期が2004年6月30日までのため留任された。
 - 3) 監事の改選：中地監事に代わり、秋葉幹事が推薦され承認された。
 - 4) NEWS CAST編集者：古野幹事の任期が終了し、新編集者として清水由紀子幹事が推薦され承認された。
 - 5) 庶務担当幹事改選：浜島庶務担当幹事が名古屋大学に転出したことから、田島幹事が推薦され承認された（庶務担当幹事に関する取り決めは規約にないが、研究会事務局である愛知県がんセンター疫学・予防部所属の幹事が担当することが慣例となっているため）。
- 次々年度の日本がん疫学研究会の会長選出（代表幹事：徳留）

次々年度の研究会（平成17年度、第28回）の会長として、渡辺能行幹事が推薦され承認された（なお、日本がん予防研究会は岐阜で行われる可能性が高い）。

4. 次年度の日本がん疫学研究会の開催（次期会長：津金）
第27回日本がん疫学研究会は第11回日本がん予防研究会（会長：国立がんセンター津田世話人）と合同で、平成16年7月15-16日予定（会場予約は1年前からであるため会場は未確定）で準備されているとの説明があった。
5. その他
将来的に特別会員数が幹事数より増えていくので特別会員を一般会員に戻すことも検討してはどうか？との意見が田島幹事から出された。特別会員に具体的な利点はないが名誉に思っている特別会員もあるという状況から、このまま継続することとなった。



第12回地域がん登録全国協議会 総会研究会参加のご案内

<http://home.att.ne.jp/grape/jacr/>

福井社会保険病院 藤田 学

開催日：総会研究会 2003年9月12日（金）
実務者研修会 2003年9月11日（木）

開催場所：福井県国際交流会館・多目的ホール
（総会研究会）
小会議室（実務者研修会）

主題：地域がん登録の利用
懇親会：2003年9月12日（金）18：30～ 葵会館（予定）

【事務局】

〒911-8511
福井県勝山市長山町2-6-21
福井社会保険病院
第12回地域がん登録全国
協議会 総会研究会事務局
TEL 0779-88-8166
FAX 0779-88-8167





第14回日本疫学会学術総会のご案内

<http://www.soc.nii.ac.jp/jea/>

山形大学医学部環境病態統御学講座公衆衛生
予防医学分野
会長 深尾 彰

学会テーマ：「疫学の実践応用」
会期：2004年1月22日（木曜日）23日（金曜日）
会場：山形テルサ（山形市）

関連行事
疫学セミナー：「臨床データを用いた疫学研究」
会場：山形テルサ（山形市）
期日：2004年1月24日（土曜日） 9:30～15:30

【第14回日本疫学会学術総会事務局】

〒990-9585 山形市飯田西2-2-2
山形大学医学部環境病態統御学講座公衆衛生
予防医学分野
TEL：023-628-5260 FAX：023-628-5261
e-mail：jea-office@umin.ac.jp



第27回 日本がん疫学研究会

会長 津金 昌一郎

第11回 日本がん予防研究会

会長 津田 洋幸

ご案内
会期：平成16年7月15日（木）～16日（金）
会場：学術総合センター（東京都千代田区一ツ橋）



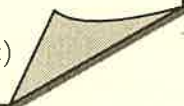
★編集後記★

古野純典先生に代わりまして、本号より、祖父江友孝と清水由紀子先生が編集委員を担当します。よろしくお願ひします。

7月25日付の新聞報道でもとりあげられたように、平成16年度からの第三次対がん十か年総合戦略が厚生労働省から公表されました。その基礎となった「今後のがん研究のあり方に関する有識者会議」報告書について津金先生に解説いただきました。わが国における今後のがん疫学研究の方向性を考える上で必読の内容と思います。また、徳留先生からは、研究生活とは少しはなれた日頃の活動の一環を紹介いただきました（集合写真の中には、田島先生、嶽崎先生、徳留先生が写っていますので探してみてください）。東海地区には健脚家の先生方が多いようですが、私自身もここ2～3年、週末は20～30kmのランニングを日課としております。中谷先生、坪野先生には、JNCI6月号に載った「性格とがん」についての論文解説をお願いしました。最近、日本の若手の先生方の論文がMajor Journalにしばしば載るようになり、心強い限りです。濱島ちさと先生には近況を、岸先生には6月の研究会のまとめを報告していただきました。幹事会議事録要旨は、これまで浜島信之先生がまとめて報告されていましたが、庶務担当幹事を田島先生と交代されたため、今回が最後の報告となります。研究会事務局としての長期にわたるご苦勞に、感謝したいと思います。

昨年1年間は、古野先生が1人で編集をしておられましたので、今回がほとんど全くの初仕事でした。原稿依頼先がどうしても身内に固まる傾向がありますので、何か目新しい情報がありましたら、tsobue@ncc.go.jp または shimizu@rerf.or.jp までご一報願ひします。

（祖父江友孝）



発行

日本がん疫学研究会

事務局 〒464-8681 名古屋市千種区鹿子殿1-1
愛知県がんセンター研究所疫学・予防部 気付
TEL: 052-762-6111 (内線 7316) FAX: 052-763-5233
振込口座 00810-2-37001

編集責任者

祖父江友孝
清水由紀子